

幕末明治の写真師列伝 第七十六回 武林盛一 その七

武林盛一は上京以来、40 を過ぎてからは目が言うことをきかないとして、写場には一度も姿を現さなかった。趣味として撃剣の稽古の他に、写真館建築の設計などもしていたが、専売特許の発明にも凝っていた。その専売特許として、ソロバン中の人立ち上がってもソロバン玉が動かないようにしたソロバンや、いつも一定の高さに炎を保たせておくバネ仕掛けのローソク立て、塵抜き水瓶などといった発明品の製作に没頭していた。また、好きな撃剣に凝って、道具を担いで猿楽町の根岸道場や警視庁に行ったり、土地の顔役芝田に勧められて、御厩谷に小さな道場を開いたりして、悠々自適の生活を続けていた。

明治30年(1897)11月9日、三島常盤の妻、まさが亡くなる。明治30年(1897)頃、頼みとしていた養子の武林直は武林盛一と営業上の意見の食い違いから出て行くことになり、湯島に小さな店を持って独立してしまう。そこで今度は札幌の三島常盤の推薦で、鈴木真一の弟子、小川顯三郎(注ルビ:こうさぶろう)を後継の写真技師とすることになった。

明治33年(1900)、武林盛一は突然起こった軽い中風のため、半身不随となってしまった。これは2、3日して回復する軽い中風ではあったが、明治37年(1904)5月に軽症の脳溢血を起こして、しばらく床につくようになった。札幌の三島常盤は師の病状を考慮して、札幌北一条道庁前のリンゴ園を擁した官舎跡の千坪の土地に隠居所を建てて、東京からここへ武林盛一を迎えることを提案したが、武林夫婦は20年住み慣れた麴町区一番町を離れがたく、武林盛一の妻、かねも元々、江戸っ子で、幼い頃から手塩にかけて育てた養子の磐雄とも離れがたく、結局、この話は無かったことになってしまった。

しかしながら、これがきっかけで小川顯三郎に番町の写真館を15年月賦で譲り渡すことにした。そして武林盛一は、当初はこの一番町の裏の崖に臨んだ庭の一部に隠居所を建てて夫婦で住む予定にしていたのだが、この機会にと札幌の土地も売却することにして、それがすぐに売れるとまとまった金が入ったこともあり、急に気が変わって新たに小石川宮下町七番地に家を新築して引っ越すことにした。武林盛一が巢鴨宮下町に家を新築したわけは、養子の磐雄が写真師にならなかつたことが一因である。

磐雄は明治32年(1899)3月に東京府尋常中学校(後の府立一中)を卒業すると、同年7月に小山内薫と共に一高文科に入学、この頃から作家になることを夢見ていた。磐雄は後に妻子と共にフランスに遊学、移住して、夢想庵と称し、エミール・ゾラなどの翻訳家、随筆家となる。武林盛一は磐雄と仲が良かった小山内薫の家の前にあった茶畑が坪2銭5厘で貸しに出ていることから、この土地を見た上でここを借りることにして、結婚したばかりの磐雄の新居とすることにしたのである。後に小山内薫も三番町からすぐ近くの小石川宮下町五番地に引っ越して来ている。

武林夢想庵(磐雄)『むさうあん物語』によれば、「(前略)さて、写真館をいよいよ公正証書の手つづきまでふんで、手ばなすことになってみると、急に養父の前途に空虚を生じて、そこに経営すべき小さな写真館でもない、どうもおさまらなかつたもの

らしい。その証拠として、この家が出来上がった時、表庭は植込の部分を出来るだけ縁側から遠く片よせ、母屋の縁を右手に、中央は飛石ばかりでガランと明き、突きあたりの隣りとのさかみには背の高い檜を中央とした、カマクラヒバを山形に植えならべ、それを背景に合写台を組立てさえすれば、いつでも三十人や四十人の合写はすぐ取れるように配慮されてあった。そうして、そういう時がくれば、母屋の一部はいずれ写真館の写場と、客間とに模様代えが出来るように工夫されてあったようにも思われる。庭はこの表のと離れの建物に属した裏庭との二つに分かれて作られてあったが、この二つの庭をつなぐ角からの手に建仁寺垣がおこり、そのうしろは、番町からはこんできた女竹のひとむらで、この地面の一隅をなした杉の生垣の内部は、やく二十坪ばかり空地のままになっていたが、養父の考えでは、おそらくこの空地へ合写台のおき場と、撃剣道場を造る考えていたものらしい。病床に寝たり、起きたりしながら、一方では門側の小家へ請願巡查を住まわせ、毎日同僚を集めて、その道場で竹刀の音をひびかせ、それをたのしむ他の一方では、下心にある写真の方は、いまだここから三崎町の大川へ通っている霧島和吉に、やらせてみるようなこともいっていた。(後略)」と記している。

磐雄はこの霧島和吉を写真技師として、自分もここで写真館の経営をしてみようかと一時、考えるが、そのことを養父の武林盛一に話すと、武林盛一は「磐雄がもし本当に写真師になる気なら、少なくとも三年大川へ通った後でなければ駄目だ」と言われた。大川の元へ通う気のない磐雄は、実父が経営している札幌の写真館と番町の小川顯三郎の写真館、それに小石川宮下町の自分がやるつもり写真館の3つを合名会社にすればすぐにでも金が儲かるのではないかと夢想するのだが、浅沼藤吉にその件を相談してみると、磐雄の派手な性格から始まって企業経営者としては向いてないと諭されて、この磐雄の気まぐれは無かつたことになった。

この頃、武林盛一はいつも頭に氷嚢を乗せて寝たきりという状態だった。ある朝、磐雄が武林盛一の枕元に坐ると、雑記帳に鉛筆で覚束なく何やら書いていた武林盛一がふと目を上げて、「仏壇を買え」と磐雄に命じた。そして、その翌日には今度は「染井へ行って墓地を決めてくるように」命じる。そこで磐雄は命じられたとおり、染井墓地の管理事務所へ行って墓地購入の申し込みをしてみると、染井には全くその余地がなく、その代わりに雑司ヶ谷に市の共同墓地ができて売り出していると紹介される。磐雄は早速、そこを下見に行き、三坪分を申し込みことにした。

武林盛一の死期が迫った日々が続き、養母を休ませるために磐雄も実父や叔父たちとかわるがわる徹夜する。磐雄は、まだ武林盛一が存命の内にと、札幌の土地の名義についてもちゃんと公正証書にして、ほとんど意識を失っている武林盛一の片手に実印を持たせて、その公正証書に捺印させている。明治41年(1908)4月9日、札幌で最初の写真館を開業した武林盛一死去。享年67歳。葬儀は浅草の東本願寺で盛大に執り行われた。法名は釈願成。武林盛一の墓は雑司ヶ谷霊園の武林家の墓になる。

(森重和雄)